不条理劇第一人者別役実が描く
劇団東京乾電池　『カラカラ天気と五人の紳士』

噛み合わない日常的なセリフが笑いを誘い、耳を澄ませばふっと物の本質が見えてくる不思議な不条理劇

スタッフ
作　別役実　／演出　柄本明　／美術　柄本明　／照明　日高勝彦　／音響　原島正治　／制作　トム・プロジェクト

出演者
劇団東京乾電池（西本竜樹　田中洋之助　杉山憲一　三平大介　吉橋航也　吉川靖子　中村はるな　柄本明）

《あらすじ》
殺風景な舞台に電信柱が1本。ボロボロの礼服に身を固めた男たちが棺桶を担いで現れる。ひとりの男が懸賞のハズレ1位でもらったという、その棺桶の中に入る人間を捜し求めているのが、五人の紳士たち。そのうちに仲間のひとりをいかに本人が死を意識しないで、死ねる方法を見つけるかという、議論が始まる。電信柱に登らされたひとりは、足を踏み外して、落下させられるのかと思いきや、街頭のソケットに指を突っ込んで感電死するというストーリーが組み立てられていく。これなら落ちて痛い思いをする前に、死ぬことができると納得する五人。そこへみすぼらしい姿の女ふたりが現れる。彼女たちは先の懸賞の本当の 1 位の当選者たちで、賞品である“青酸カリ”をプレゼントされていたのである。そして目的は見事、自殺すること。しかし薬局の手違いで、“青酸カリ”は、単なる“重曹”だということが判明してしまう・・・。
《解説》
別役実は日本の不条理演劇を代表する作家として数多くの作品を世に送り出しています。この「カラカラ天気と五人の紳士」は 1992 年に「五人の紳士」シリーズの第 3 作目の戯曲として書かれました。別役作品の特徴は、登場人物が「男1」「女2」など固有の名前を持たないことや、まるで日常的でないシチュエーションにあります。しかし、その一つ一つは、現実にある人の暮らしの中で、よく起こり得る体験や事件と深く結びついています。

上演時間：約 1 時間 30 分

劇団東京乾電池プロフィール
1976 年、自由劇場出身の柄本明、ベンガル、綾田俊樹らを中心に結成。その後高田純次らが参加し、アナーキーな笑いを武器として渋谷ジァンジァンを拠点に急成長を

遂げ、1980 年開始の伝説的番組「笑ってる場合ですよ!」にレギュラー出演(「日刊乾電池ニュース」)し大ブレイク。その後も岩松了による作品を紀伊国屋ホールや本多劇場などで上演し、80 年代の小劇場ブームの中心的存在となる。90 年代以降は柄本明による演出でシェークスピアやチェーホフと言った古典や、小津安二郎監督の「長屋紳士録」の舞台化などで話題を集めた。高田純次、松金よね子、田口浩正など現在も活躍する多くの役者を輩出した。

別役実プロフィール

1937 年、旧満州(現、中国東北部)生まれ。鈴木忠志らと劇団早稲田小劇場を創設。戯曲『象』(1962 年)で注目され、『マッチ売りの少女』(1966 年)と『赤い鳥の居る風景』(1967 年)で第 13 回岸田國士戯曲賞を受賞。1971 年、『街と飛行船』『不思議の国のアリス』で紀伊國屋演劇賞受賞。同年『そよそよ族の叛乱』で芸術選奨新人賞、1987 年に戯曲集『諸国を遍歴する二人の騎士の物語』で読売文学賞、1988 年、『ジョバンニの父への旅』で芸術選奨文部大臣賞を受賞。2007 年、『やってきたゴドー』で第 11 回鶴屋南北戯曲賞、第 42 回紀伊國屋演劇賞を受賞。2008 年朝日賞受賞